

土井洋一・田中章夫両先生への感謝

文学部長

吉田 敦彦

土井洋一先生は、昭和三十二年に学習院大学文学部に国文学科が創設されてから四年目の昭和三十六年に、当学科に着任された。爾来、平成十四年三月をもって御定年で退職されるまで、じつに四十一年の長きにわたって国文学科、また平成三年からは日本語日本文学科で教鞭を取られ、文字通りに学科の歴史を生きられまた御自身がそれを築き上げてこられた。そのあいだに平成七年から九年に日本語日本文学科の主任をおつとめになられたほかに、昭和五十八年から六十年にかけては教職課程の主任をおつとめになるなど、大学に対しても多大な貢献を果たされた。

思い返せば私は、昭和五十七年の四月から昨年の三月までちょうど二十年のあいだ、土井先生を大先輩として仰ぎ見ながら、同じ学科に奉職させて頂いたことになる。そのあいだ先生についてとりわけ印象の深いことは、先生がどのような場面でもつねにえも言われぬほど柔和な御温容を保たれ、それぞれの考えを声高に主張する者の多い学科の教員たちのあいだで、際立って寡黙であられたことだ。そうすると侃々諤々の議論が次第に、各人が思い思いに述べることに、静かに耳を傾けられた上で土井先生が御感想のように漏らされる、穏やかなお言葉によって、自然に一つに集約されて、学科の意思がまとまる。それから土井先生は、人目に立とうとされぬまさに縁の下の力持ちのようななさり方で、学科の総意が具体的な形を取って実現するように、周到なお心配りをされながら、労を惜しまれずに尽力して下さった。私の在職中の昭和六十二年に、当時の国文学科に日本語教育コースが設けられ、それによって学科が一つの画期

的な発展を遂げることができたのも、思えばそのような土井先生のお骨折りによるところが、いかに大きかったかが、しみじみと痛感される。

田中章夫先生は、その日本語教育コースの専任の教授として、開設の初年度から着任され、呱呱の声をあげたばかりのこのコースの土台固めのために、平成二年に長嶋善郎先生がご着任されるまではとりわけ、孤軍奮闘のご尽瘁をなさって下さった。その後はその長嶋先生に、さらに平成五年からはその年に着任された故徳川宗賢先生を加えたお三人で、傍目にも羨ましく感じられるほど、互いに肝胆相照らし合われたお仲の睦まじいトリオを組まれた。そして水を得た魚のようにさもお楽しそうに協力されながら、溢れるほどのご慈愛をもって学生たちの教育と指導にお力をお尽し下さって、日本語教育コースを正に磐石の基礎の上にお据え下さり、素晴らしい充実と発展を遂げさせて下さった。当時の三先生の水魚のお交わりのご様子は、心暖まる思い出として、今でも昨日のこのようにまざまざと目に浮かぶ。

田中先生も、平成十一年から御退職の年まで三年の長きにわたって、教職課程の主任をおつとめになられたことでも、大学全体のために、貴重なご貢献を果たされた。先生はまた、着任される以前にすでに、海外での盛んなご活躍によって構築されていた御人脉を、学習院のために存分に活用されて、学科と大学のために絶大な寄与をされた。大学が現在、大きな目標の一つとして掲げている「国際化」の端緒は、田中先生を生みの親とする交流協定が、文学部とオーストラリア国立大学アジア学部とのあいだで、平成四年一月に締結されたことで開かれたと言っても、けっして過言ではないと思われる。この協定は以後、毎年約二名ずつの留学生を相互に交換することで、着実な成果を積み重ね、平成十二年七月からは両大学間の交流協定となつて、今日に至っている。学習院大学はその後、数多くの海外の一流大学と交流協定を結んできているが、その中でもこのオーストラリア国立大学との協定は、もつとも実質的な効果をあげてきたものと言えるのではないかと思われる。

田中先生の御在職中に、ご指導に当たられた大学院生の中から、三人の博士の学位取得者が輩出したが、その三人は真田治子さんが日本、イブラヒム・ワリードさんがエジプト、申鉉竣さんが韓国と、国籍がそれぞれ違っている。また

修士課程で先生のご薫陶を受けた野原佳代子さんは、その後、オックスフォード大学で博士の学位を取得された。さらに先生は御退職後には、さっそく台湾の東呉大学に招聘されて、現在もそこで客員教授をおつとめになっていらっしゃる。これらはまさに、国際人であられる田中先生ならではのことで、感心させられる。